

英語学習者のための発音指導の覚え書き

近藤 富英

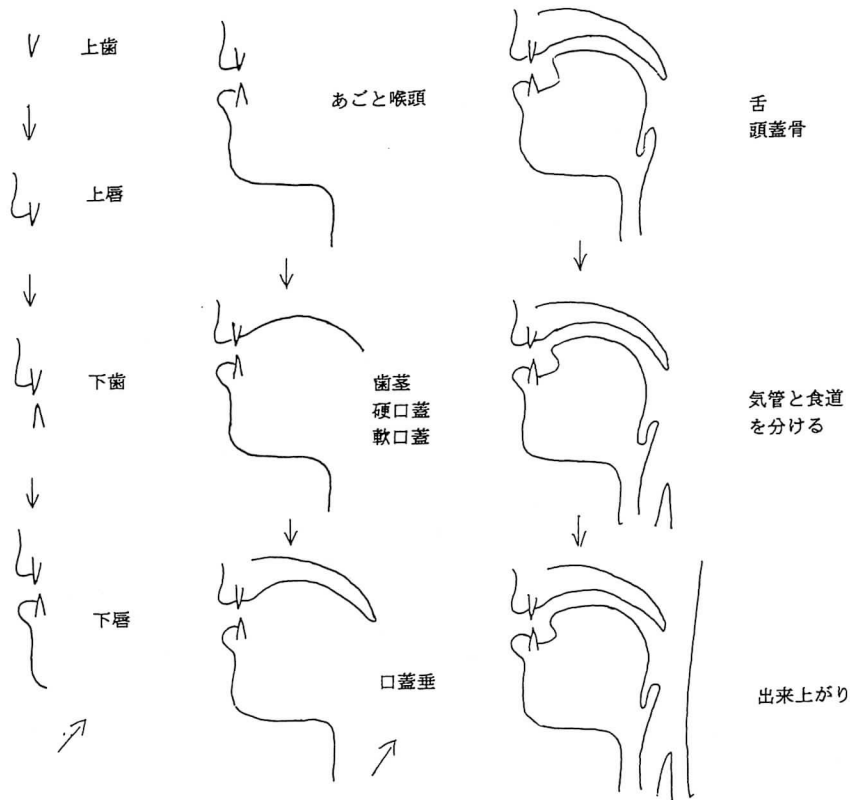
1. 発音を学ぶ意味

外国語学習において「自分で実際に発音できる音や音のつながりは聞き取れるものだ」とはよく言われることです。たとえば milk, silver, cool などの語は、しいてカタカナ表記をすると「モーク」、「ソーバ」、「クーオ」のように聞こえることがありますが、自分でもそのように発音できると、それらの音や語が聞き取りやすくなるというものです。あるいは、英語を母語とする人は Did you eat? という文を場合によっては軽く「ジュイ? [dʒui]」のように発音することがあります。ちょうど数えるときの 7, 8, 9, 10 の 10 に軽く「イ」のような音を添えて上昇調で言うわけですね。英語の音の世界はまさに弱肉強食であり、慣れていないとこのような音のつながりやくずれは聞き取りにくいものですが、実際自分でも発音を試して言えるようになれば、聞こえてくるようになるということです。逆に言えば、自分で発音できない音はなかなか聞き取れないということになります（ただし、われわれにとって唯一(?)の例外は [l] と [r] でしょう。これは発音の仕方を理解し自分で発音ができても、なかなか聞き取れないことは多くの英語学習者が経験上知っていることです）。すなわち、個々の音の発音や音のくずされ方を学ぶことは、英語の聞き取り能力の向上のためにも大きな意味があると言えるでしょう。もちろん英語がいわゆる国際語となり、さまざまな英語の変種が見られる今日、英語を母語とする英米人とまったく同じように話す必要は無いと言えます。日本式の発音、中国人の英語、フィリピンで話される英語などがあるのは当然ですし、それらは英語とそれによる言語生活を豊かにしてくれるとさえ言えます。しかし、そのような変種や訛りを楽しむことができるのはコミュニケーションにほとんどなんの支障も無いときだけでしょう。さもなければ理解しにくい多くの変種を前にフラストレーションに陥ってしまうかもしれません。そういう意味で、最初から安易な妥協をするのではなく、英語の聞く能力を伸ばすためにも発音の正しい理解とそのため練習は英語学習においては不可欠です。また、せっかく学習者は日本語を知っているわけですから、場合によってはうまく日本語の音と比較しながら英語の音を学ばせることができれば効率がいい場合もあります。以下は筆者がふだんの授業で折に触れ用いている発音指導の覚え書きからのいくつかです。

2. 発声器官の口腔図

音声学の本を開くと必ず顔を横向きにした発声器官を示す口腔図が掲載されていますが、舌の位置や唇のようす、空気の流れを示すには便利な図と言えます。教師が折に触れこの図を書いて口のようすを示すのは発音指導の際に有用であると思われます（もちろん音声学の基礎的な知識と国際音声字母の子音図と母音図の理解は言うまでもありません）。ちなみ

に私がこの口腔図を黒板等を書く順番を下に示してみました。歌はありませんが、子どもの数え歌の要領です。要は自分の一番書きやすい方法でいいわけです。



学習者は口腔図を教科書などで見る機会はあるけれども、実際にそれが書かれる過程を見たことはないでしょうから、いい意味の刺激を与えることもできるでしょう。あとは、これを基にして唇や舌の位置、口蓋垂（のどひこ）などをそれぞれの音に応じて書き直します。

なお、この音声学で用いる発音器官を示す図は、医学書などに出てくる口腔内を示す図がいつも右を向いているのに対して、こちらはほとんどいつも左を向いています。ところで彼にはりっぱな名前があるのをご存じでしょうか？ William Smalleyの *Manual of Articulatory Phonetics* (William Carey Library, 1963) には次のような説明が載っています。

This will introduce Sam Mansfield. Sammy is a gentleman who always looks westward (if you think of the paper on which his picture appears as being a map), but his “leftist” look is not the most significant thing about Sammy nor the most convenient. The importance of Sammy lies in the fact that you can see inside his head. Sammy is the result of what would happen if you carefully sliced right down through a man’s head from front to back and then drew a rough schematized diagram of what you saw, particularly emphasizing those parts of Sam’s exposed anatomy which are especially significant for the production of speech sounds. (p. 1)

つまり、彼の名前はサム・マンスフィールドといい、愛称はサミーというのです。いつも左を向いている無味乾燥な図も、こんな情報を与えることで学習者にとっていくらか人間味を帯びた存在になり、発音の学習が少しでも身近に感じることができるのではないかと思います（なお、上記の英文の説明の中で口腔図を head と表しています。つまり、head はいわゆる日本語の頭だけではなく、頭と顔を合わせた首から上の首から上の部分を意味することもこんなところからわかります）。

3. 子音について

日本人の英語を英語らしく聞こえさせない理由の一つは子音が弱いということがよく指摘されます。ここでは日本人が比較的苦手とする子音について発音の工夫を中心に述べてみたいと思います。

3. 1. ハ行の秘密

日本語のハ行は音韻としては、つまり私たちの頭の中では/ha, hi, hu, he, ho/となっていますが、実際は [ha, çi, Φu, he, ho] として実現されています（以下、音韻としての音は//で示し、実際の音は [] で示します）。日本語話者は日本語の「ヒ」や「フ」を発音するとき、[h] の音を使わないため、たとえば英語の he や who などを発音するときでも日本語の「ヒ」や「フ」のくせを英語に持ち込む傾向にあります。英語の [h] (voiceless, glottal fricative) は摩擦の生じるのは声帯のみで、口の中ではきしむことなくずっと出てくる音です。たとえば英語の世界ではサンタクロースの笑い声は HO HO HO! と記されるのですが、日本の女性などの上品な「ほほほ」とはかなりようすが違い、英語の [h] は喉から勢いよく発せられます。それに対して日本語の「ヒ」(hard palatal fricative) は舌が持ち上げられ、硬口蓋、すなわち口の天井の前半分の硬い部分との狭い隙間を空気を通り抜けて出てきます。また、「フ」(bilabial fricative) の音は唇の間で摩擦されながら出てくる音です。日本語の「ヒ」と「フ」の音は [h] の音とはまったく違い、英語には存在しないこととなりますが、英語の [h] で発音すべきものを「ヒ」や「フ」で置き換えがちになるのです。対策としては、この違いをはっきり学習者に認識させたあとで、以下のような説明で [h] の音の感じをつかませることができると思います。

○冬、寒い風にあたった手を息で「ハー」と暖めたり、ガラス拭きの時、ガラスに「ハー」と息を吹きかける時の感じ

○「ホー、ホー、ほたる来い」の時の「ホー」

○フクロウの「ホー」という鳴きまね

日本語の「ヒ」との違いを認識させるためには悪魔などの笑い声「ヒヒヒ」を例に出すこともできます。これは硬口蓋の近くで摩擦が起こるので凄みが出るのであって、これを [h] の音でやったらしまりのない悪魔になってしまうでしょう。

以上のようなことから英語の [h] と日本語の「ヒ」や「フ」との違いの感じがつかめたらそれを he [hi:] や who [hu:] に応用します。history や boyhood なども今度は [h] の音で発音できるようになるでしょう。ただし、huge [hju:dʒ] などの場合は意味からくる

勢いやあとに [j] が続いているため、日本語の「ヒ」に近く発音されますが、これはやむを得ないというよりは自然な現象だと言えるでしょう。また、東京下町では「ヒ」と「シ」の区別がないところから、he の [h] をあまり下手に発音すると she になってしまうかもしれません。

なお、このことに関連してですが、[f] (labio dental fricative) の音を「フ」で代用させる傾向もあります。たとえば office の場合、つい唇をすぼめて「フィ」と言ってしまうのです。[f] は上歯で下唇（の内側でもいいが）を軽くかめばよく、これは覚えればそれほど難しいことではありませんが、せっかくかんでも発音する時にもとに戻ってしまう人もいるので注意が必要です。また、この「軽く」かむというところが難しく、とくに有声音の [v] の場合、あまり強くかみ過ぎると [b] に似た破裂音になることもあるようです。幸いこの [f] や [v] は摩擦音で長く伸ばすことができるので、極端に伸ばす練習などを通して音の感じをつかむことができるでしょうし、fall-hall, foam-home などのミニマル・ペアでの練習もできます。なお、声門を狭める [h] の音はフランス語などのロマンス語系では調節できないようです。

3. 2. 「はずかしい」と「はずかしい」

次に日本人の間違いやすい音として [dz] と [z] を取り上げてみます。一般に日本人は日本語の影響で [z] を [dz] に置き換える傾向があります。つまり、「残念」、「座敷」のような語の最初の音は [dz] なので、たとえば英語の zoo [zu:] はどうしても [dz:] になりがちです。ただ、英語ではこの二つの音は語頭で対立しないためたとえ [dzu:] と発音しても訛っているという印象は与えるでしょうが、通じることは通じます。なお、cars と cards などの場合は、対立はしても語末のため勢いが弱まり、英語の母語話者でさえも無頓着の場合が多いのですが、大部分の場合、コンテキストで理解できるようです。しかし、英語の練習としては、これらの違いをはっきりと自覚しておくべきでしょう。

音の練習として [z] は [s] という無声音に声を添える感じで出すようにするのがいいようです。なお、[dz] と [z] の区別としては「はずかしい」([-dz-]) と「はずかしい」([-z-]) とを対立させて感じをつかませることができるでしょう。

4. 母音について

次に母音について少し考察してみます。

4. 1. 「イ」でもなく「エ」でもない

[i:] と [i] はその発音記号のため [i:] は [i] プラス [:] として考えられがちですが、それぞれ無関係の独立した音としてとらえるほうが理解しやすいでしょう。東北地方ではいわゆる「イ」と「エ」の区別をあまりはっきりつけないと言われ、どちらかというとその中間の、英語で言う [i] に近い音だと思われます。東京アクセント、つまり共通語の「イ」はどちらかという [i:] に近いようです。もちろん英語の音と日本語の音が完全に一致することはほとんどありませんが、上のような話をすることによって [i:] と [i] の違いを

学習者に理解させることができるでしょう。なお、日本語では意味を持っている音の長短（たとえば「おばさん」と「おばーさん」、「間い」と「遠い」、「ボヤ」と「坊や」など）が英語ではあまり意味をなさず、むしろ音質そのもので意味を識別しています。そのため'eat it'などを日本式に長さだけ変えていたのではeatと言う語を二度繰り返したととられる恐れがあります。Scotish EnglishではI'm pleased to meet you.の[i:]がほとんど長く伸ばされないで発音されるという極端な例もあるようです。

[i:]は幼児が相手を怒ったとき向かっていう「イーだ!」のように舌を少しこわばらせ両唇を左右に引きながら言うと言音しやすいうですし、[i]は「胃がイテテッ」のように舌はあまりこわばらせず、「イ」と「エ」の中間をねらえばいいでしょう。ビスケット[bis-ki:t]の[ki:t]が「ケット」になっているところからも[i]は「エ」に近いということで学習者には納得できるでしょう。

4. 2. 「ラブ」と「あなたぁ?」

loveの[ʌ]は喉の奥から短く「ア」とも「オ」ともつかない独特な響きで発音されます。唇や舌からやや力を抜いたような形で、舌のもっとも高い位置が口の中の中央付近にきています。このため強勢を受けても音色は[a]の音に似てきます。

この音の出し方としては、後ろから呼ばれて思わず短く「あ!」っと振り返ったとき出る音に似ていますから、学習者に「後ろから呼ぶから振り返りながら「あ!」と言ってごらん」と指導することができます。たとえば「松本駅で会ったとして呼びかけますから「あ!」と答えてください」と言いながら学習者に呼びかけるとクラス中は「あ!」「あ!」と言いながら笑いの渦になってしまいます。

[æ]は「エ」と「ア」の中間の音だとよく言われます。日本語では意味の弁別には使われませんが、知らぬうちに使っていることがあります。たとえば、甘えて「あなたぁ」などと言うときには[æ]の音が生じることがありますし、「あぁあ、疲れた」などと言うときも投げやりな調子で言うとき、この音を使うことがあります。こういう話をすると学習者はおもしろがって聞いてくれますし、実際は知らないうちにでも使っているんだという自信を与えることもできるでしょう。

5. ま と め

おもな音だけに言及し完全に網羅することはできませんでしたが、学習者に興味を持たせるようなや音声指導の材料はたくさんころがっているということを少しでも示すことができたら幸いです。もちろんI'm going toをくずしてわざわざI'm gonnaという必要はないでしょう。しかし、相手がI'm gonnaと言ったらやはり聞き取れなければなりません。そして聞き取るためには自分でも必ずしも言わなくてもいいのですが、言えるような練習をしておく、とても聞き取りやすくなるということを述べました。あわせて日本人の苦手な音のいくつかのポイントとその対策を見てきました。ここで触れることのできなかつた音や音のくずし方、さらにイントネーションやストレス、さらに談話という大きな単位で考えた音声の特徴もいろいろ研究されていますが、それらはまたの機会に触れることにします。